
涙のふるさと

藍玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙のふるせと

【著者名】

藍玉

N4480G

【あらすじ】

涙を流さないと誓い、自分を変えるために一人暮らしを始めた早乙女一樹。これから、新しい生活をするはずだつたんだけども、あんな奴やこんな奴が絡んできてもう・・・滅茶苦茶!?

プロローグ 始めのいっぽー（前書き）

小説とかホント書くの初めてなんで、アドバイスとか指摘とかたくさんしてください！
よろしくお願ひします。

プロローグ 始めの一いつぼー

ザー……ザー……

外は朝と変わらず雨降っている……。
まるで、自分の今の気持ちを表しているよつだ。

「はあ……」

「ンンン。俺の部屋のドアがノックされる、多分美咲だな。

ガチャヤツ。
やっぱり美咲だった。

「一兄……。」

「一兄と呼ばれたのは俺。

「一兄、昼食持ってきたけど……ここに置いておくれね？」

でも、俺は返事をしない。否、返事ができない。
そう、俺は今泣いてるから。

中学3年の卒業式、俺は今まで付き合っていた彼女と別れた。
俺は本気で好きで、本気で付き合ってたつもりだった……。

しかし俺たちは別れた。

彼女は暴力が大嫌いだった。

だから、俺は彼女と出会つてからは一度も喧嘩をしたことがなかつた。

だけど、とある奴らが彼女を妬んで変な噂を流した。

俺はそんな奴らが許せなくて・・・喧嘩になつた。でも、それがいけなかつた。

彼女が偶然現場を通りかかつて見られたんだ。彼女は怒つた。
そして俺たちは・・・別れた。

別れてからの俺はすごい荒れた。簡単に言えばグレた。
気に食わない奴がいれば殴り飛ばしたり、喧嘩を売られたら躊躇せずに買う。

そのうち、俺に近づく奴も少なくなつていった・・・。
俺としてもそれはうれしかつた。近くにいる奴、誰であろうと殴り

そうな、そんな衝動に駆られることがあるからだ。

でも、休日は誰とも会わないよつに部屋にこもつている。
雨の日はついい、あのときを思い出して今みたいに泣きじやくつてしまつ。

でも、この涙も今日で最後。

俺は、今この孤児院を出て明日から別のところで暮らす。

新しい場所では、俺は変わる。新しい人生を歩むんだ。

だから、今日だけは・・・これで最後だから今日だけは泣こう。

涙を拭い振り返る、すると美咲のほかにもう一人。

そう、美咲の姉妹達。

小学生くらいの小さいのが美春、そして長身で髪が長い女性が美希さん。

「お兄ちゃん大丈夫?」

美春が心配そうに覗き込んでくる。

「ああ、大丈夫だ。俺は大丈夫。」

そう、俺はこれから新しい地に向かうのだ。大丈夫じゃないといけない。

「美春も俺がいなくなるけど頑張れよ?」

俺はさつきまで泣いていた顔で、無理に笑う。きっとひどい顔だろう。

「美春は寂しいけど、泣かないよ。だからお兄ちゃんも泣かないで。
・
・
・」

「あはは、一樹、美春に慰められてどうするのよ」

「美希さん・・・うつさい。」

そう言った俺は、リュックを持って玄関に向かつ。玄関には一人の・・・里山夫妻が立っていた。

「尚志さん、尚美さん、今までありがとうございました!」

「いいのよ、つらくなつたらいつでも戻ってきていいからね?」

と尚美さんが優しい言葉を掛けてくれる。

「別に戻つてこなくていいぞ。お前の行く先で、本当のお前を見つけてこい。」

尚志さんが、厳しくも力強い言葉で俺の背中を押してくれる。

「本当にありがとうございました…。」

俺は深く頭を下げ、回れ右。
後ろを振り向かず駅に向かつて歩く。

「お兄ちゃん、行っちゃったね」

「どうせ一兄のことだから、すぐに飛びじくなるに決まってるわよ」

「ふふふ、そうね。さて、私たちも準備しますか」

美春、美咲、美希の三姉妹が家に戻り、荷物の準備をする。。。

「ふふふ、一樹君の驚く顔が目に浮かぶわね。」

美希の不気味な笑い声に気づかず、一樹は新しい自分の道を歩み始めた。

プロローグ 始めの一いつぱー（後書き）

プロローグ、なんかちょっと寝る前に考えてたんで日本語的におかしかつたり、前後のつなぎが変だつたりしたかも・・・。
感想、アドバイス、誤字脱字の報告など待っています！

1話 親切な人（前書き）

とりあえず、初日だけ何話か放り込んでおきましょ笑

1話 親切な人

「・・・すつげー都会・・・。」

俺、早乙女一樹は、目の前の光景に思わずそんな言葉を零してしまつた。今まで自分が住んでいたところに比べるととんでもない光景だつた。

一樹は今まで田舎の孤児院で暮らしていたのだが、その孤児院の経営が苦しくなつてしまい潰れてしまつた。だから、今まで孤児院で暮らしていた人たちは数少ない親戚を頼つたり、俺みたいに補助金やバイトの金を頼りに一人暮らしをし始めるしかないのだ。

「あ、アパートまでの地図が・・・無い!?あれ?リュックの中に
も・・・無い!」

しまつたあ、入れ忘れたのか?全然ないぞ・・・。どうしようかな。
・・・。

「どうしたんですか?」

俺が、リュックを抱えたまま地面に付していると、上からなにやら女性の声が。

「ん?俺?」

顔をあげると・・・なんだ。声が大人っぽいから大人の人だと思ったけど、俺と同じくらい・・・制服着てるから高校生くらいかな?

「はい、なにやら凄く落ち込んでいたようなので、どうしたのかな

ー?と

ほえー。世の中にはこうやって人の事を心配してくれる人がまだまだいるんだな。世の中捨てたもんじゃない。にしてもこの場合なんて対応すればいいのだろう?

- 1 「ふつ、気にしないで下さい」とかいってかつによく立ち去る
- 2 「道がわからなくて・・・」と素直に聞く。
- 3 「地底人と会話してたのやー」とか、意味不明な事を言つてみたりする。

・・・悩むな。普通に考えれば2だが、3も捨てがたい・・・。

「あの~?」

はっ! いかんいかん、ついつい一人で考え事する癖がついている。というか、悩むような事じやなかつたしね。

「白鷺荘しらさぎやうつてところに行きたいんですけど、地図なくしちゃつて・・・」

素直が一番。結局2を言つといった。

「白鷺荘なら、場所わかりますよ。私の友達が住んでいて良く遊びに行くんです」

まあ、おれもこれからそこに住むわけだけどな。

「もしかしてあなたも?あれ?でもあまり見たこと無い顔だけど・・・」

今日始めて磯崎に来たんだからな。見たこと無くて当然だろ。

「ああ、俺は今日磯崎に引っ越してきたから。これから田舎荘でお世話になるんだ。」

「ああ、じゃああなたが噂の・・・？」

噂？まだ一度も来た事の無いこの町で、俺はもう噂になつてるので？やつぱり、駅前で地面に寝そべつてたからかな・・・？いや、それとも・・・。

「あの～？変な事考えてません？私の友達・・・あ、柿山由紀って言つんですけど、由紀が今日新しい住人が来るって言つてたので・・・。」

「ああ、なるほどね。」

ふうむ、由紀とやけり。俺の事を勝手に噂しやがつて・・・。プライバシーの侵害だ！訴えてやる！

「あの、やつこえば駅前まだでしたよね？私、桃瀬春香ももせはるかといいます」

「俺は早乙女一樹。ヨロシクな。」

なんか、もう知り合いが出来たぞ。幸先いいな。地図が無くなつた時はどうじょうかと思つたけど、良い人もいるし。磯崎はいいところだな。

1話 親切な人（後書き）

文が変だつたり、誤字脱字があつた場合報告を下さい！

2話 管理人は鬼だつた！？（前書き）

見てくれてる人いるんかな～？

2話 管理人は鬼だった！？

お？そんなつまらない話をしているひがい、それっぽい建物が見えてきたぞ？

「ひーです。ひーが白鷺荘です。」

ふうむ。一皿で言えば普通。ビニールでもあつそつなアパートだな。

「案内ありがとうございます。俺はちょっと管理人さんと話していくから・・・」

「あ、そうですか。じゃあ、私はこれで。」

と言つと、大家さんのところに歩いていく俺に手を振つてくれた。ここの笑顔で手を振り回しておこう。ん？春香の顔が赤っぽい気がする。きっと、俺が気持ち悪い笑顔振りまいたからだな。自分の親を恨むぜ。

「ピンポーン

・・・返事が無いよ？でも、言われたとおりの時間だから出かけてたりはしないと思うんだけどなー。とりあえず、連打してみるか。

「ピンポンピンポンピンポンピンポン」

・・・ダダダダダダッ！

おおー？なんか凄い勢いでドアに向かってきてる気がする。

「うぬせえよ……一回やれば聞こえるつつのー。」

おおー? めっちゃガラ悪い人出てきたんだけど! ? 髪の毛銀髪で、ピアスとかして、この人が……管理人かな?

「あの……白鷺荘の管理人ですか?」

控えめながら、一応聞いておく。つか、まじこええよ。

「ああ? セウだけど。お前誰だよ。」

「えつと、今日から白鷺荘に住む早乙女一樹なんですけど」

「ああ、お前がね……悪い悪い、今昼飯食つてゐからちよつと中入つて待つてくれ」

なんつうか……こんな人が管理人つて。大丈夫なのか? このアパート。

「おじゃまします……つわつー」

きつたね——部屋がカツプラーーメンの残骸とか、ティッシュとか、その……大人向けの本?とかで埋まつてる。こんなところによく生活出来るな、この人。

「ま、そちら辺に適当に座つてくれや」

ちょ、このひと床の物蹴つてスペース作つてますけど……なにこれ、ここに座つて良いつて事だよな……?

「ズズーッズズズーツ」

「旨そうにラーメン食べるなー。そういうえば俺、ずっと電車乗つてたから飯食つてねえじやん。あーやべ、本当に腹へつてきたわ。

「で、だ。お前が今日、ここ白鷺荘に引っ越してくる早乙女一樹で間違いねえな？」

「はい、そうです」

「俺は一応白鷺荘の管理人やつてる鬼頭魔叉斗おにがしらまきとだ。これから夜露死苦な」

どう考へても族かなんかやつてた人にしか見えない。名前もなんかありえない感じがするし・・・なんか、凄いアパート入っちゃつたかも？俺、どうなるんだろう？

2話 管理人は鬼だった！？（後書き）

つか、自分的に早く学校の話に行きたいなーとか思つてます。

3話 新たな家と（前書き）

眠いです。今日は11時30分におきて、なんだか頭がぼや~っとしてます^~^；

3話 新たな家と

「部屋は203だ、小僧。生活に必要な物は大体揃つてると想つか
ら氣にするな。足りないものは自分で買いに行け。」

「へえ、一応揃えといてくれたんだ。見かけとは違つて面倒見のいい
人なのかな？」

「おー小僧、今変な事考えてなかつたか？」

「え？ いやいや何も考えてませんよ。」

「・・・そうか。じゃ、俺は自分の部屋にいるからなんがあつたら
呼べ。なんもねえのに呼んだらぶつ殺すから覚悟しどけ・・・。」

「う・・・ういっす！」

・・・やっぱ怖い人だなー。

「二二二が俺の家・・・」

「うおー！ 一人暮らしが始まつた感じ！ なんか、メッチャわくわくし
てきたー！」

今なら逆立ちしたまま階段が上れそうな気がするー

「・・・早乙女君、なにやつてるの？』

「「つおー？」

本当に逆立ちじみつと黙りて、両手を地面につけたところ、誰かに呼ばれた。

見上げてみると……

「春香じゃん。あれ? 帰ったんじゃないの?」

そう、そこにはさつき知り合つたばかりの春香が困つたよつな顔して立つていた。

ちなみに今の状況は俺が階段下でクラウチングスタートみたいな格好してゐるのを階段の上から春香が眺めてる感じね。

「あ、今まで由紀の家にいたの。今から由紀とスーパーに買い物に行こうと……」

「春香ー、何やつてんのー? って……あんた誰?」

「おおっ、なんか……なんか出てきたーー!? つて、話の流れからしてその由紀さんなんだろ? カビだよ。」

「あ、由紀。この人が早乙女一樹くん。今日、由紀と一緒にこの白鷺荘に引っ越してきた……んだよね?」

「おー。俺のこと紹介してくれるとほ……春香ってホントいい奴だな。おじさん涙が出ちゃうよ。」

「俺がその早乙女一樹。今日から203号室に住むことになつた。同じアパートだから会つ機会も多いだろ? これからアロシクな。」

「私は柿山由紀。201号室……あなたと反対の端っこだね。そこ

「住んでるよ。 やりしへね。」

説明しよつー白鷺荘は1階は101～104（101は鬼頭さんと1J）で2階は201～203しかない。つまり！俺の部屋が右の端つ1Jで、由紀の部屋が左の端つ1Jなのだ！イメージできただろうか？

「一樹？あんたこきなつぱへつどいひしたの？」

「こやこや、親愛なる読者様にわかりやすく説明を、と。」

「ふ～ん～よくわかんないけど、大変なのね。」

ふつ、そのうちお前もなんか言わなくちゃ行けなくなるかもしけれないとお腹のヤールが終わっちゃうよ～。

「由紀、ちゃんと行かないとお腹のヤールが終わっちゃうよ～。
「ウソー～～わー～～じや、わざわざ1Jの一樹は必ず来るのよ。一緒に来る～。」

「いや、俺はとうあえず部屋見ておきたいし。昼飯は後でどうとかするよ。」

「そうですか・・・」

「おおっ！？俺、選択ミスったか！？春香がなんか悲しげな感じに・

・

「そ、んじゃ春香ー急ぐわよーー！」

と、言つたかと思つたら、春香の手を引っ張つてあつといつ間に見えなくなってしまった。

おつと、俺も自分の部屋確認してわざと毎飯食べよ。後でコンビニでも買って貰つてくるかな。

4話 銀髪な鬼妹！？

「一む、実際に部屋の前に立つて見ねり改めてドキドキしてくるな・・・。

ガチャリ・・・

ドアを開けて中を見てみると・・・

「へえー、結構きれいだし広いし・・・。それに冷蔵庫や洗濯機とかまである。」

鬼頭さん、ホント揃えておいてくれたんだ。後で感謝してよひかな。
てか・・・」れ、家具類何もいらないんじやない?

腹も減つたけどなんか疲れたな・・・。寝よつかな?

「つて、ん?」

なんか、ベッドの布団がもうひとつ。まるで、中になにかあるみたいに膨らんでいる・・・。

これは・・・あれか!? 鬼頭さんがなんか置いていつちやつた的な?
それか・・・幽霊とか、ミイラなんてことか・・・ないか。
とりあえず、布団取ればわかるな。

「ひっやつー・・・・・・おおー?」

布団を剥ぎ取つてみればなんと中には・・・。

なんか知らない中学生くらいの少女が一てつれへ

「うへ、うへてれへとか言つてゐる場合じやねえ……」

とりあえず、観察してみよう……。

髪は銀色で一つにしばつてある……。

顔もまつげが長くて鼻もすりと伸びて……あれ？結構かわいい？

「困つたな……。どうしたよつへ……」

困つたときは……困つたときは……！

「鬼頭さん……！」

そうだ……さつや、自分から困つたことあつたら呼べって言つてたし……

俺はもう音速と回じくらこの速さで鬼頭さん^君に行つた……。

「ポンポンポンポンポンポンポンポンポン……」

ダダダダダ……

お~なんかさつきも「んな」とがあつたような気が?

「うぬせえクソ小僧……普通に呼べねえのかー？」

「そんなことより、鬼頭さん!大変なんですよー。」

「ああ？ ぐだりねえ」とだつたら、鍋で煮て食ひやー。」「

・・・俺なんか鍋で煮ても味くねえよー。てこつか、鍋にこねこりねえよー。

「なんか、俺の部屋で寝てる娘がいるんですよー。」

ふふふ・・・これは鬼頭さんもびっくりだな。

「ああ？ どんな奴だ？」

「髪を一つで結んでて、髪の色が・・・セーフー。鬼頭さんみたいなきれいな銀色でした。」

と、眞づと鬼頭さんはなんか急に疲れたような顔をしてため息ひとつ。

「はあ・・・。あの馬鹿・・・。」

とさつと、俺を押しのけて俺の部屋にてこづて、なんで若干怒ってるんですか？
つて、置いていかれかけまつー！

追いつくと、鬼頭さんはもう俺の部屋の中であつた美少女となんか言い合つてゐる。

「おこ、馬鹿ー。なんでこんな場所にこらねんだよー。」

「うわこ馬鹿兄ー。兄さんのとこいの臭くて死んじやつよー。」

「臭くても生きていけるだろ？が！それ以前にそこまで臭くねえよ！」

・・・？喧嘩ですか？といふか・・・兄妹！？

「ええええええええ！？」

あ、なんか今日一番の声が出たかも。

4話 銀髪な鬼妹！？（後書き）

んやー、一日にどれだけ投稿するとかわからんないっすねー。一日に何作も投稿すると品切れになるし、でもせつかくだからたくさん読んでほしいし…。

あ！アクセス解析したら結構な人が見てくれることがわかりました！

ありがとうございます！

読みにくかつたりしたら言つて下さいね。時間があるときに直し、次からはそのようにするので。

でわでわ、また次回あいまじょうへノシ

5話　これひで回面ですかね？（前書き）

正直、最後のほう無理やりまとめた。」
文をまとめることが苦手っぽい俺ですね。
コジとかあつたら教えてください！

5話 これって何話ですか？

とまあ、色々あつまして…。

「えっと… もう、鬼頭さんの妹さんですか？」

まだあんま信じられない…。だつて…ねえ？」の妹といの兄貴つて…。

「ああ、一応俺の妹。鬼頭…」

「鬼頭真紀おにがじり まきです 今日からお兄さんの家でお世話になつます」

「…。やっぱり兄妹だったんだ。こじても、今なんか変な言葉が聞こえたような…？」

「えつと…・・・お兄さんつて？」

と、俺が言つと真紀ちゃんは勢い良く俺を指差してきた。
そして、頭を下げるといつもいつもいた。

「早乙女一樹さん…私、このまま馬鹿兄貴の家で過ごしてたらいつか「キブリになつちゃいます！」だから、お兄さんの部屋と一緒に住ませてくれませんか？」

「え…いや、まだ会つたばかりだし…。それに男と女の子が一緒の部屋つて言つのはね？」
さすがにまずいですよね？鬼頭さん

鬼頭さんに救いを求めてみる。

「あー、この馬鹿妹は引き取つてくれたほつが煩くなくていいんだけどな。」

あつさり裏切られたあーつていうか、あなたの妹でしょ、うが！？

「お兄さん……」

ああ、そんな目で見つめなこでおくれ。そんな潤んだ目で見つめられたら僕は……

「鬼頭さんから許可が下りたら……」

「おつ、持つてけ持つてけ。」

「ちよー俺の最後の抵抗があつさつと……？」

「これから、お世話になるねーお兄さん」

と血つと真紀ちゃんは俺にタックル……もとい、抱きついてきた。

……なんか早くも新生活が不安になってきた。これから的生活は女子と一緒に暮らすらしいですよ？早乙女さん。

「んじゃ、一件落着つてことで、俺は帰るな

鬼頭さん冷たい……つていつか、真紀ちゃんあつかんべーとかしなくていいから！

「お兄さん！私たちも一人の愛の巣に戻りつ

あー、なんかもうどうでもいいやー。なるよつになれつ！

部屋に着くと真紀ちゃんはソファに座つて自分の隣を叩き、俺に「座れ」と促してくる。

仕方がないからとりあえず向かいのソファに座つとした。

「ええ～。何で隣に座らないの～？」

「いや…なんとなく…かな？」

「ま、いいや。改めて自己紹介ね！私は鬼頭真紀。一応さつきの鬼頭魔叉斗の妹だよ。」

「俺は早乙女一樹。今日、引っ越してきた新人だ。ヨロシクな。」

その後、真紀ちゃんは魔叉斗さんところに行つて、自分の必要なものとか持つてきて・・・いわゆる簡単なお引越しめたいなことを始めた。その間、俺は近所のスーパーって言うスーパーに行って（正直、ふざけた名前だと思った）夕飯としばらくの食材を買って（二人前な）夕飯を作つて（一人前な）早いうちに寝た。

なんだかんだ言つていろいろあつて疲れたし、何より明日からは学校だからな。

ここらで一番大きな学園「桜葉学園」^{さくらばがくえん}の高等部に転入する。高一なのに転入なんておかしいと思つた人？手あげて。

手下ろしてもいいですよ～。この学園は初等部、中等部、高等部と分かれていますよ～。この学園は初等部、中等部から高等部

にあがるから俺みたいな奴は転校生扱いになるらしい。

さて、明日も疲れる予感がするし、もう寝よう。おやすみ～…ぐう

ＺＺＺ

5話 これって同居ですよね？（後書き）

ね？最後ちょっと無理矢理だつたよね？
すいません。反省します…。

それと、余談なんんですけど。公立高校落ちましたw
やつちまいりましたよへへ…まあ、私立でがんばりますわ笑

6話 なんか飯作るのも樂しいな（前書き）

・・・書を溜めしてたの吃きました。r_n
なんか、最近アイディアが浮かばなくて・・・。
すんませんへへすこし更新が遅れるかもしれません。

6話 なんか飯作るのも楽しいな

バキッ！ ドカッ！

喧嘩をしている・・・相手は誰か良くわからない。
けど、俺が喧嘩をしている。3対1で劣勢なのにも関わらず、一人
ずつ確実にして仕留めていく。この光景を俺は知っている。もうす
ぐ、教室のドアが開いてあいつがやってくる・・・。

「ガララッ！！」

「...夢ですかよ。朝から笑えねえよ。」

寝汗すごいかいちまつたな。でも、汗よりも気になるのが一つ。
多分、俺の目がおかしくなければ布団の中に何かいるんだよなー。
しかも、昨日と同じような膨らみ方。という訳で、答えは一つ！――

「真紀ちゃん、何で俺の布団入つてんの！？」

とりあえず突っ込んでく。どう対処するかはその後でもいいはずだ。
それにしても、これ。起こすべきだよな？時間は...5時30分。
やっぱ起こさなくてもいいが。シャワー浴びて朝飯作つてよ。

「やつぱ、日本の朝じはんつて言つたら、飯、味噌汁、焼き魚に納豆だよな。」

シャワー浴びてスッキリ爽快！！

そもそもって、朝じはんができた俺は真紀ちゃんを起して行く。一応7時だけ、まだ寝てるのかな？

「コソコソ

ドアをノックして（あれ？俺の部屋だよな？）部屋に入つてみると。

「ジーッ」

なんか、真紀ちゃんに睨まれた。何故？ why? what, where
re, who, - how…もう一個あつた気がするけど忘れた。

「真紀ちやんどうじしたの？俺の顔に何かついてる？」

とこりが、むしろ懲りてる？

「…朝起きたらお兄さんがないなかつた。」

そりこりと、ふくらひした頬をふくらーっと膨らませる。可愛いな。思わずつづきたくなる。

…シンシン

つづいてみた。すると真紀ちゃんはなぜか顔を赤くなり俯いてしま

つた。

何かのスイッチだったのかな?

「あ、いいや。朝(ア)はんできたから早(ア)く食べおこでよ?」

真紀(ア)ちゃんは「クン」と頷くと、赤い顔のまま硬直してしまった。
ま、そのつづ来るだろ。

とりあえず、朝食を先に食べる…ってこのも悪いから、TVでも
見て待つてようかな。

ふむふむ…今日(ア)は午後から明日(ア)の昼にかけて雨(ア)か。傘(ア)忘れずに持つ
てかないとな。

つと、今日(ア)の占(ア)いが始まつたといひで真紀(ア)ちゃんが来た。

「よひ、改めておはよひ」

「おはよう、お兄さん」

ところが、やつれまでの事はまるでなかつたかのよう(ア)飯(ア)を食べ
始める真紀(ア)ちゃん。

あれはなかつたことにしておけり。なんか、そんなオーラを感じる。
わへ、わへわへと飯(ア)をひきやこますか!

そうこえ(ア)ば、桜葉学園の制服つてどんなんのか知つてる? 初等部は私

服でいいらしいんだけど中等部から制服着用が義務づけられるらしい。男子の制服は普通のブレザーなんだけども、女子の制服がね。校長の趣味か知らんけど、スッゴイ可愛いんだよ。もつ、言葉に表せることができないくらい……！」

とか言つてゐるうちに、行く準備が整つた。そついや、皆さんの高校なんだろ？

春香と由紀が同じところだらう？ そんで……

「お兄さん？ 早くこいーーー！」

「ああ……つて、真紀ちゃんも桜葉！？」

「え？」 こいつ辺にいる人は皆桜葉だと思つよ、ちなみに、私は中等部だよ

ほほお。つてことは春香も由紀も桜葉だな。いやー。知り合いがいるつづれしいな～。

「んじゃ 真紀ちゃん、行こつかーー！」

ついに始まる俺の学校生活！ 期待で胸が膨らむ・・・・・！

6話 なんか飯作るのも樂しいな（後書き）

ところが、今、100冊もある宿題出されて、4円の5枚までにやれ
つてすこ無茶言いますよね？

どこの高校だ！（俺の高校だ・・・。

あー・・・とりえず、勉強も小説も、遊びもがんばりますヒー！

7話 何で泣くのだかわからない（前書き）

「うくしょー！高校の宿題。問題集だけだと思つたら
「自分の生い立ち」なんて作文も書かなくちゃいけない打なんて…。
なんて書けばいいのや。

まず、何から書けば？書き始めがわからない…；
誰か教えてくださいませんか？

7話　何で注目されただらへ。ひつか罪に罪に

「つまむおおおおーでっかーーー。」

と俺は叫ぶ。そりやもひ馬鹿みたいに叫ぶ。
隣で真紀ちゃんが恥ずかしそうにしてるけど、そんな知ったことではない。

そのくらい学園がでけーんだよー東京ドーム4個分らしこよー。

ちなみに、俺は今校門の前で校舎に向かって叫んでいる。

「お兄さん、恥ずかしいし早くどかないと嘘の邪魔に……」

「あんた、邪魔よ。」

「ゲフッ！？」

いきなり蹴られた…。しかも膝裏を。
無残に崩れ落ちる俺。

ちっくしょう、こきなつ蹴つてくるほどんな奴だ…? ゲひ顔を拝ませてもひる・・

「あれ? 由紀か。あ、春香も。おはよー。」

ああ、そういえばこの一人もいたなあ。学園にショックを受けすぎてすっかり忘れてた。

「…早乙女君、おはよー。」

「一樹おはよつ。あんたものこの学園なんだね。」

春香が何か言いかけた気がするんだけどな…。ま、いいや。

「ああ、俺も今日から桜葉学園の仲間入りだぜ。四口シクなー。」

つと、そういえばさつきから奥のほうにすこし人が集まってるなんだろ?..

「あーあそじでクラス発表してるよー。」

真紀ちゃんがさう言うならそうだろ?。でも、俺は職員室に行かなければ行けない…。地図片手にね。だって広いんだもん!..?迷子になっちゃうじゃんかよッ!!

「本当だ!早乙女君もあそじで名前あるかな?」

「いや、俺は職員室に行かないと。」

そう!俺は職員室に行かねばならない!だから春香のこの悲しそうな顔もどうしようもない…。なんでそんな顔するのさ!..?

「わっか…。じゃあ、また後でね!..」

「私も中等部のクラス割り見に行きますね」

という訳で、いったん解散。俺はさつと歩き出す。

だってね?一応かわいい子が一人ともう一人(由紀)いる訳じゃん?なんか、メツチャ人に見られてるんだよ…。今もまだ見られてるし。早く職員室にいこ!

・・・

ここかなー？一応地図見て来たけど若干不安。
普通さ、職員室とかつて看板みたいなものがあるじゃない？」「いや、
ないんだよね。

コンコンッ

「しつれいしまーす」

ノックと挨拶。これ基本ね。

「「あ…。」「

ドアを開けると、先生は一人もいない。変わりに一人の女人人が本を読んでいた。

髪色は黒というよりも紺色に近い。そして腰まで伸びるストラッシュとしたまつすぐした髪。

大人の雰囲気みたいな感じが漂ってる…。すっごくきれいな人だ。リボンの色からして、先輩らしいってこともわかる。

「あなたが早乙女君？」

「え？あ、はい。」

職員室だから、先生がいるとばかり思つてた俺は、生徒がいること

に少し動搖していた。

「私は工藤千尋。^{くわいとうちひな}この学園の生徒会長を務めている。好きなものはエビフライとコーヒー牛乳。嫌いなものは刺身。好きなタイプは強い人……だよ。」

自己紹介された!?^{シテル}は…俺も返しておくれ!・・!かな?

「俺は早乙女一樹。好きなものは和食全般。嫌いなものはマヨネーズ。好きなタイプは特ないですね。」

正直、前のことがあるから好きなタイプとかわからなくなってるんだよな。

だから、そこだけ適当に答えておく。

「ええ!?^{シテル}早乙女君マヨネーズが嫌いなの!?

「え!?^{シテル}に反応する!?

先輩にっこり突っ込んできました。マヨネーズのにおいが駄目なんだよな~。

「ところで、ほかに誰もいないようなんですが。俺の他に転校生つていなーいんですか?」

そう、この部屋には今俺と工藤先輩しかいない。俺が早く着きすぎたのかなー?って思つたけど、今はもう9時。始業式も、もう始まつてゐる時間だらうし(多分)。さっきの俺みたいに迷つてるのか?

「後3人いるんですけど、なにか引越しの整理がどうとかで明日か

「うへーと…。俺含めて4人もですか？」

「うーん…です。」

「今年はお引越ししがブームなのか?だったら俺は流行の最先端を突っ走つてることになるな。やつたぜ!」

「早乙女君のクラスは1-こね。そのうち担任の先生がここに来るからそれまでこれでも読んでおいで。」

「そういって工藤先輩は俺に薄い冊子をくれた。れ、一樹が「なぞの本」を手に入れた!」

「先輩これはなんですか?」

「それにこの学校の歴史とか校風とか色々書いてあるから暇つぶしにでも読んでて。」

「そうかそうか、早速読んでみよう!」

「なになに?この学校が創設されたのは…。」

「くつだめだ…俺にこの手の本は…ぐう…NNNNN。」

7話　何で注目されたんだ？・どうか隠して（後書き）

いやあ、なんとか更新できましたよ。

執筆中だったのを急ピッチで！

そして何でかしらないけど少し長めに・・・。

これから、毎回7話くらいこの長さにしてみつかな？

明日こそ更新できるかわかりません。生い立ちの作文もかかなくちゃいけないので笑

ガララッ！

先生が来た。まだ若い男の先生。背も高くめがねをしている。
あー。もてそうな先生だな。
しかし！俺は今絶賛睡眠中なので、気にしない。

「君が早乙女君ですか？」

「先生よりも今の睡眠の方が大事だ。ここで何か反応をしたら負けだ！」

「寝てるのかな？寝たふりしてるのですか？」

「・・・。」

「んー、どうしようかなー。」

「ええい！俺のことはあきらめてさうさんに行ナー

「とつあえず工藤さんにキスでもしてもらひつかな？」

「ええー！？」

この教師…のほほん系の癖に、いきなりびっくりしたことついじやねえか。

思わずリアクションしちまった…俺の負けだ。

「若林先生？どうしてそこで私が出でるのかなー？って思つんだけど？」

「いやー。早乙女君、起きてたぢゃないですか。1-Cに案内しますよ。一応転校生扱いにさせてもらひつかり、最初は廊下で待機。僕が言つたら入つてきてくださいね。」

「あれ？ちょっと、私無視ですかー！？」

「あ、あと教科書運ぶのも手伝つてくださいね。」

なんか工藤先輩可愛そになつてきた・・・。

「...工藤先輩。ドンマイです。」

うなだれてる先輩の頭をそつと撫でてみる。あ、なんかサラサラしてて気持ちいい。

「早乙女君...ありがと」

お、元気でたつぽいな。もう少し、頭撫でたかつたけど...

「寝ぼすけな早乙女君？早く教科書をお願いします。」

いつの間にかドア付近にいる...名前なんだ？そういえば、さつき工藤先輩が若林先生つて言つてたか。

「つて言つた先生！台車なら一人で教科書余裕じゃないですか！」

普通に一人で持つていいくには多すぎる量の教科書。それも台車に乗

せてしまえば誰でも運べる。絶対に俺いらない……。

「こやいや、僕ももう若くないですから。ソフコツ仕事はまだまだ若い人に頼みますよ。」

「むう、つまり……。

「面倒くさいことじてことですね？ ま、運びますナゾ。」

「いやあ、ありがとうございます。若こつて素晴らしいですねー。」

…なんかめっちゃ胡散臭え先生だな。

・・・

その後は特に喋ることなく、1こと書いてある教室に着いた。

「じゃ、早乙女君はしばらくここで待っててくださいね。あ、教科書は僕が持つてきますから。」

とこつて、先生は中に入つてこつてしまつた。
ドアに耳を当ててひょっと中の様子聞いてみるか。

「え～みなさんおはようございます。僕はこのクラスを受け持つことになつた担任の若林充といいます。気軽に「みつちゃん」と読んでくれて良いですよ。」

みっちゃん…自分で何をいつてるんだこの人は。

「眞、中等部からの繰り上がりでしょう。周りが顔見知りばかりでつまらないかと思います。」

いや・・・別につまらなくはないだろ。有意義な高校生活送ろうぜ?

「しかし…このクラスに新しくこの学園にやってきた転校生がいます！」

ウオオオオオオオオ！！

「先生！転校生は女ですか！？」

「いえ、残念ながら転校生は男ですよ。」

「えええええええ。」

ひ…ひでえブーイング…。主に男。そこまで女に飢えてんのかよ。

「しかし！女子の方々は喜んでください！性格も素晴らしい！その上イケメン！早乙女一樹さん、入ってきてください！…！」

みっちゃん先生！ どんだけハードル上げるんですか！ しかも女子が怖い。このクラスは男女ともに飢えてるのか？

…ともかく行くしかないなつ！覚悟決めろ、俺――！

なんか書きたいことが山ほど…。まず、今日も何とか続きが投稿できたこと、ホント良かったと思います^ ^

そしてもう一つ…。

最近読書の幅が広がり、ファンタジー系の小説も読ませていただきてるんですけど、すごい文を書くのが上手な人がいてですね…。

なんというか…自分の小説、読みにくくなつて思つて。

なるべく色々な方に気持ちよくスムーズに読んでもらいたいので、「こうしたほうがいい」、「ここがダメ」等のアドバイスが欲しいです。お願いします。

（追記）

お勧めの小説つてないですかね？

単純に面白いもの、勉強になるもの等あつたら教えてくださいね

9話 友達たくさん欲しいな。

っしー！覚悟決めるか！

「ガラララッー！」

生徒たちがいるであろう方向は向かない。決して向かない。とか向けない！
決してイケメンなどではない俺の顔なんて向けれない。

教卓にたどり着いたものの、下を見る俺。

「ああ、自己紹介してください」

「の…。誰のせいでも自己紹介しつらくなつてると思つてるんだよ。
仕方がないから… 本日一度田の覚悟決めるか！」

俺は勢いよく顔を上げる！そして教室を見渡すと… 春香がいた。
ああ、なんだ知り合いいるじゃんか。少し気が楽になる。

「早乙女一樹です。関西の田舎方から引っ越してきました。都会にはまだ慣れないところがあるので、至らないところもあると思つ
けどヨロシクお願ひします。」

む… 静寂が…。

「キヤーーー！」
「ワアーーー！」
「カツコイーー！」
「ヨロシクねーー！」

「「ラボーーー！」

おおう、時間差か…。やつちやつたかと思つたぜ。ドキッとした、ドキッ。

「それじゃ、早乙女君は後ろの窓際の席ですよ。」

おおおおー後ろの窓際といつたら…。神戸へいらっしゃる極の席！
これで俺は昼夜し放題…

「あ、近ごろうちに席替えしますからね～

…ちつ。

まあ、黙つて席に着いへ。
つと、隣の奴と田が合つた。

「僕の名前はほんじつけなまえ本堂和輝かずきヨロシクね、転校生さん。」

「俺は早乙女一樹。隣になつたのも何かの縁かもな。ヨロシク。」

隣の席に挨拶しておく。隣つて言つても窓際だし一人しかいないんだけどね。

後で春香にも挨拶しておへかな。

「今日はこれで学校は終わりです。皆さん気をつけて帰つてくれださ

いね。今から部活のある人はがんばってください。」

「そうこうとみつちゃん先生は風の如くいつけた。何か用事でもあんのかな？」

「早乙女君？」

「ん？ 一樹でいいよ。俺も和輝って呼ぶからさ。」

「わかったよ。一樹君、部下に入れるか決まってる？」

「いや、そういうや全然考えてなかつたな。和輝は何か部活やつてんの？」

「ふふふ…。よく聞いてくれたね！ 僕は陸上部に入つてるよー！ それでね、全然考えてない一樹君にお願いがあるんだよ。」

全然考えてなくて悪かつたな。

「で、お願ひつて何？」

「陸上部に入つて欲しいんだ！」

「えー…。なんで？」

「陸上部は今、初、中、高等部合わせても男子の部員が女子の部員に比べて少ないんだよ！ 肩身が狭いんだよ！ 寂しいんだよーーー！」

「思いつきりお前の私情じやねえか！」

てつたり、部員が少なくて部活がつぶれるんだー」とか言つて呟つた。

「嫌かな？」

「嫌つてこいつか…。まだ部活やるかどうかすら決めてないし、どんな部活があるかも知らないからなんとも言えないな〜。」

「やつか…。」

考え込む和輝。にしても陸上部ね。走るのは嫌いじゃないけど、ん。

「い…一樹君…じゃあ、私が部活の案内しようか！？」

「この声は…・・・!？」

「あ、春香。部活の案内つて?」

言つてから気づいたけど、「部活の案内」の意味がわからないうてやばいよね。

「あんた…部活の案内つてそのまんまだと思うけど~。」

「由紀もいたのか。部活の案内をしてくれるつてことだらっ。そのべらり俺だってわかるよ。」

「じやあ何で聞いたのよ?」

「ワカンネ。なんとなく…かな?」

全く、なんであんなこと聞いたんだろ。

「それよりも、春香。部活の案内して貰れるのか？俺はすこい助かるけど、迷惑になんね？」

「ううん、全然迷惑じゃなこよ。私の部活、今日は休みだし。」

「んじゃ、お願ひするかな。由紀と和輝は？」

「私はバスケ部。ちやんと今から汗水垂らして練習するのよ。」

「僕もやつを言つたとおり陸上部があるから……。本当は僕が案内したいんだけどね。」

「いやいや、無理するな。」

にしても、由紀バスケ部か。身長もあるし納得だな。

「よしーじゃあ行くか！」

「あ、うんーー樹君待ってよー。」「

9話 友達たくさん欲しいな。（後書き）

更新一日?二日?遅れて「めんなわー」へへ
宿題とか（まだ終わらん）、祖父の家に進学の報告行つたり…。
言い訳してもつまらないですよね笑

えっと、最近ちょっと小説書くモチベーション下がってきたけど、
この9話書いてたらまた上がってきました！
でも、連日更新は少しきついかも…。最低でも一週間に一回は投稿
するので、どうか見捨てないで読んでやってください。

10話 部活動見学インザ体育館！（前書き）

更新が遅くなつたこと、本当にめんなさい。

入学前は色々忙しいんですね…ん？入学した後も忙しいような気がするよ？あれあれ？そしたら毎日忙しい気が…。

とりあえず、更新が止まらないよつこがんばります（ビンビンハーダルト）がつてる気がする。

10話 部活動見学インザ体育館！

とまあ、とりあえず体育館に行くことになった。

春香が言うには体育館は第一体育館と第二体育館があり、第一体育館ではバスケ男女、ハンドボールをやっていて、第二体育館ではその他小さな部活が活動しているらしい。

第一体育館は、少しこの校舎から遠いらしいので

第一体育館　運動場　時間が余つたら第一体育館　と行く事に決めた。

「一樹君？ 着いたよー？」

お、読者の皆様に説明していただついたようだ。

「んじゃ、行きますか！」

・・・

「あちいな……。」

そう、室内で大人数が運動をしているため、熱気が半端ないのだ！
ほんとに！

春香はバレー部の友達に見つけて、仲良く話をしている。

俺は、友達なんてまだまだ少ないから……ん？

「君、見学の人？」

隅っこで壁にもたれかかってたら声かけられた。バスケ部の女の先輩だな。髪は短めのいかにも「運動最高！」って感じの人。

「まあ、一応。」

バスケ部を見学…って訳じやないしね。だから「一応」って言つといた。

「そりなの…?じゃあ、隅っこじやなくて真ん中来なさい」

そういうと、先輩A（仮）は俺の手を持つてなんか人だかりに突っ込んでいく。

「ちょ、先輩！？俺他にも色々な部活見たいんですけど…？」

「ん？いいのいいの」

何がいいんだよ！バスケは体力メツチャ使うから嫌なんだよ！

「嘘…！イケメン君が見学にきたよーー！」

誰がイケメンだ！誰が

「きやー！カツ」「イー！！」

「バスケ部に入るの？」

「メールアド教えて！メールアドー！」

「…今夜、暇？」

「きみ転校生?」

「俺と愛の道を」

なんだ」こいつら……。初等部から高等部まで集まってきた……。何うか、若干気持ち悪い奴がいたな。

ん？俺が言つ前に、さつき無理やり引っ張ってきた先輩A（仮）が一喝。

「えー、でも部長が連れて…」

「いいから！練習再開！ホラつ！！」

はたから見てて思うけど、この先輩、自分勝手だな。人を集めておいて煩くなつたら散らす。なかなかひどいことするな。

「いやー、今ねやくなつてび」めんね？」

「いえ、気にはせんよ。」

：あんたのせいだけどな。

「あ！自己紹介するね。私はバスケ部の総合部長、城野縁、高等部3年だよ。」

「俺は早乙女一樹、今日転校してきたばかりの高等部の一年生です。

L

「転校生? そういうえば、うちのクラスにも来るとかって…」

ん?あの、今日は来れないって転校生のことか?

「ふむーーーちょっと来てくださいーーー」

遠くの方で城野先輩を呼んでる人がいる。部長だもんな、城野先輩も忙しいんだろう。

「あ、『めぐね。ちょっと行って来る~。ゆくよしてってね』

と書かれてたの子のところに走っていった。
正直あまりゆきへりあるつもつはないしな。それそろ外の部活も見たいし。

…ん? そういえば、春香何処にいった?

10話 部活動見学インザ体育館！（後書き）

とうあえず更新しました！

訪問PVが2500突破しましたよ！すごい嬉しいです^ ^

俺のバリバリ初心者な小説読んでいただいて光栄です。これからも精進しますので、感想やアドバイスなどくれるともうと嬉しいです^ ^

話し変わりますけど、明日入学式ですわ。入学して4日後にはなんか泊まりでどこか行くらしいですし。。。つて、友達もまだ少ないのに泊まりかよ！？みたいな笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480g/>

涙のふるさと

2010年10月15日21時16分発行